

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2025年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	比較文明学専攻
研究代表者 (2026年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏 名	
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年	馬 目 悠 太 郎	
指導教員	所属部局・職名	氏 名	
	文学部・教授	渡 名 喜 庸 哲	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	「環境世界」概念を中心とする「害」についての哲学的考察		
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏 名	
研究期間	2025 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
本研究は、災害や核・原子力の惨事、海洋や大気汚染といった現代のリスク社会における地球規模の問題群を「害」にまつわる諸問題として捉えつつ、マルティン・ハイデガー（1889–1976）の著作 <i>Sein und Zeit</i> において提示された「環境世界」概念を手がかりに、私たちを取り巻く環境およびそのうちに生じる「害」とはどのようなものなのかを分析することを目的としたものである。その際に研究代表者は、(A)「害」についての概念整理、(B)「環境世界」概念の精緻化と拡張および応用可能性の検討、という二つのアプローチを採用し、それを踏まえて研究を遂行することで最終的に学会発表を二度行い、公開研究会記録を一つ刊行した。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[環境世界] [害] [恐れ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

上記の研究課題において 2025 年度に取り組んだ研究の目的は、災害や核・原子力の惨事、海洋や大気の汚染といった現代のリスク社会におけるミクロかつマクロな問題群を「害」にまつわる諸問題として捉えつつ、マルティン・ハイデガー(1889-1976)の著作 *Sein und Zeit* (『存在と時間』)において提示された「環境世界(Umwelt)」概念を手がかりに、私たちを取り巻く環境およびそのうちに生じる「害」とはどのようなものなのかを分析するものであった。

以上の研究目的を達成するために、本研究代表者は (A)「害」についての概念整理、(B)「環境世界」概念の精緻化と拡張、および応用可能性の検討、という二つのアプローチを設定した。それによって研究を進めることで、最終的には以下の成果を達成することができた。

- (1) ハイデガー『存在と時間』における「恐れ」の感情についての議論の解釈を通じた、恐れ - 有害なもの - 環境世界の相互作用の明確化。
- (2) 〈災後の環境〉概念の創出、およびそれを参照点とした「環境世界」概念の再検討・精緻化。
- (3) ギュンター・アンダーズ(1902-1992)による「核兵器」に関する哲学的考察の読解を通じた、環境世界において現出する有害な事象に対する「恐れ」の感情の射程と限界についての考察。

以下、(1)～(3)の具体的な成果物(後述)の内容に基づきながら、上記の研究成果についての概要とその意義を提示する。

(1)の研究成果は、上記の(A)と(B)のアプローチの両方にかかわるものである。研究代表者は、実存思想協会第41回大会(2025年6月28日)にて学会発表を行ったが、そこではメインの読解対象としてハイデガー『存在と時間』の第30節「恐れ」論のうちの「恐れの対象」に関するハイデガーの議論を取り上げた。これまでの『存在と時間』研究では、①そもそも「恐れ」論自体が「不安」論(第40節)の陰に隠れてきたせいもあってかあまり読解されてきておらず、加えて②「恐れの対象」に関してはほとんどその内実が明らかにされてこなかった。それに対して研究代表者は、ハイデガーが「恐れの対象」として考えていた「脅威を与えてくる有害なもの」は、私たちが日々生活する「環境世界」において特定のコンテクストを伴って現出してくるものであること、ゆえにそれは単なる主体-客体関係の構成要素としての「対象」ではなく、むしろ「私の実存が脅かされるかもしれないし、脅かされないかもしれない」という〈可能性〉が「切迫してくる」事態である、ということを明らかにした。恐れ - 有害なもの - 環境世界の相互作用を〈私が脅かされる可能性〉という観点から明確化するこの視点は、これまで「恐れの対象」の内実を深掘りしてこなかった先行研究には欠けているものである。また、以上の成果をもとにして、本発表では、ハイデガー「恐れ」論が現代の「リスク」論に対して新たな視座をもたらし得るのではないかと提起し、またハイデガー「恐れ」論が、私たちが脅かすさまざまな出来事を記述することのできる射程の広さを有していることを主張した。それによって、ハイデガー「恐れ」論の現代的な事象に対する応用可能性をも示唆することができたのではないかと考える。

(2)の研究成果は、主に上記の(B)のアプローチにかかわるものである。そもそもハイデガーにおける「環境世界」とは、そのうちで私たち人間が日常的に生活しているところを意味している。しかしこの概念が、本研究の根本的な関心である災害や核・原子力の惨事、海洋や大気の汚染といった極めて大規模

研究成果の概要 (つづき)

かつ過酷な事象をもその射程に含むことのできるものであるかは定かではない。そこで、研究代表者は、災害や核・原子力の惨事、海洋や大気汚染等の「破局」的な出来事が生じた環境を〈災後の環境〉として概念化した上で、哲学者・動物行動学者であるドミニク・レステルの研究を参照しつつ〈災後の環境〉を人間のみならず動物、植物といった存在者の観点からも思考する必要があること(なぜなら現代においては人間のみならずあらゆる生命が脅かされているから)を確認した。加えてティム・インゴルドの思想を参照し、〈災後の環境〉および当の「破局」的な出来事を思考するにあたっては「水」や「空気」といった生命維持にとって必要不可欠な物質の存在も重要ではないか(なぜなら「破局」的な出来事によって「汚染」されるのはそれらの物質であり、それを通して私たちは害されるのであるから)、と問題提起した。以上の研究から見えてきたのは、ハイデガーによって提示された「環境世界」概念が、あくまでその主体を人間としてのみ捉えているという点で一定の限界を有しているということである。なお、以上の研究は、まず立教大学文学部人文研究センター主催の公開研究会「人間と人間ならざるもののあいだ：ドミニク・レステルをめぐって」(2025 年 5 月 22 日)にて英語で口頭発表を行い、最終的には同発表の原稿およびその発表にまつわるレステル氏との質疑応答を、日本語へと翻訳した上で『Limitrophe』第 9 号(2026 年 3 月 31 日刊行)に掲載した。

(3) の研究成果は、主に上記の(A)と(B)のアプローチの両方にかかわるものである。研究代表者は(1)(2)の研究を進めていく中で、環境世界において現出する有害な事象ひいては「破局」的な事象を私たちがどこまで恐れることができるのか、という問いに取り組む必要があることに思い至った。そこで、当初の研究計画段階では予定していなかったが、立教比較文明学会研究大会(2025 年 10 月 4 日)にて研究発表を行った。そこでは、私たちが「害」する事象とそれに対する私たちの「感情」(とりわけ恐れ)との関係性を問う、という方針のもと、両者の結びつきの「極限」の地点を考えるために、政治活動家であり哲学者でもあるギュンター・アンダースによる「核兵器」についての哲学的考察を読解した。具体的には、①アンダースが『時代おくれの人間』にて提示している「絶対的に大きすぎる」ものとしてのアポカリプスとそれに対する私たち人間の情態性(感情)に関する分析を読解し、それを②ハイデガーの「技術」論を比較対象とすることで、アンダースの「アポカリプス」論の位置づけを整理することを試みた。そこで明確になったのは、現代に生きる私たちにおいては、「核兵器」にたいして抱く「べき」恐怖の大きさと「実際の」恐怖の大きさが乖離してしまっているという事態であり、このような在り方をアンダースは「アポカリプス不感症」と呼んでいる。私たちの恐れは感情的に、その射程に限界を抱えているのである。このことを踏まえて研究代表者は、アポカリプスとしての核兵器は「絶対的に大きすぎる」がゆえに「手段ではない」というアンダースによって提示された命題を読解し、核兵器は大気や雨水、海、食糧等の手段を汚染することによって、それらを役に立たないもの(もはや手段ではないもの)へと変えてしまうがゆえに「絶対的に大きすぎる」、と解釈した。加えて、アンダースによる以上の議論を、ハイデガー『講演と論文』所収の「技術とは何だろうか」における「総かり立て体制」の議論と比較することで、両者の議論の類似性と差異を暫定的に確認した。

以上、本年度は、ハイデガーの「環境世界(Umwelt)」概念を起点として、私たちを取り巻く環境およびそのうちに生じる「害」とはどのようなものか、私たちは有害なものをどのようにして恐れるのか、反対に私たちは何を恐れることができないのかについて分析してきた。これによって研究代表者は、当初に設定した研究計画・目標を概ね達成することができたと思う。

※この(様式 2)に記入の成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

④その他(学会発表)

馬目悠太郎「ハイデガー『存在と時間』における「恐ろしさ」の所在」、実存思想協会第41回大会(於：立正大学)、2025年6月28日。

馬目悠太郎「「絶対的に大きすぎる」ものに対する恐れの可能性——ギュンター・アンダーースにおける「アポカリプス」をめぐって」、2025年度立教比較文明学会研究大会(於：立教大学)、2025年10月4日。

④その他(公開研究会記録)

馬目悠太郎「〈災後の環境〉をいかにして思考するか」、『Limitrophe』第9号、2026年、64–68頁。